

近代世界システムと北アフリカ海賊

桃井治郎

要旨 北アフリカのオスマン帝国アルジェ領・チュニス領・トリポリ領を拠点とする海賊は、15世紀末以降3世紀にわたって地中海に出没した。北アフリカ海賊の歴史は、15世紀末から16世紀の誕生期、17世紀から18世紀の存続期、19世紀初頭の終焉期に分けることができる。誕生期は、オスマン帝国とスペイン帝国が地中海の覇権を争い、それに伴って海賊も活発化した時期である。存続期は、北アフリカ諸領がヨーロッパ諸国と和平条約を結び、海賊の活動が沈静化した時期である。終焉期は、ヨーロッパにおけるウィーン体制下の協調外交によって北アフリカ海賊の廃絶が決議され、北アフリカ諸領に軍事的圧力が加えられた結果、海賊が廃絶していく時期である。

一方、同時期のヨーロッパでは、イマニュエル・ウォーラーステインのいう近代世界システムが生成していた。世界システム論における「長期の16世紀」および「長期の17世紀」には、北アフリカ諸領は近代世界システムの外延部にあったが、近代世界システムが再拡張期を迎える「長期の18世紀」の後半になると、北アフリカ地域は政治的にも経済的にも近代世界システムに組み込まれ、周辺化していく。

世界システム論の観点から見れば、15世紀末から19世紀初頭における北アフリカ海賊とは、北アフリカ諸領が近代世界システムの外延部に位置していた時期に、近代世界システムとその外部にある世界システム間の争いの一形態として現れた存在であった。また、北アフリカ海賊の存在は、15世紀末から16世紀にかけてスペインによる北アフリカ征服を妨げ、結果的に北アフリカ地域が近代世界システムに組み込まれるのを遅らせる役割を果たした。ただし、19世紀初頭には、北アフリカ海賊は資本主義的世界経済の活動を阻害する存在として廃絶の対象となる。そして、近代世界システム拡張の障壁となっていた海賊の廃絶後、北アフリカ地域は近代世界システムに組み込まれ、周辺化していくのである。

キーワード：北アフリカ、海賊史、近代世界システム

The Modern World-System and the Corsairs of North Africa

MOMOI Jiro

Abstract The corsairs, based in the regencies of Algiers, Tunis, and Tripoli of the Ottoman Empire, ravaged the Mediterranean for three centuries since the end of the 15th century. The history of North African corsairs can be divided into three periods: 1) the period of birth in the late 15th and 16th centuries, 2) the period of persistence in the 17th and 18th centuries, and 3) the period of decline in the early 19th century. The period of birth was the time when the Ottoman Empire and the Spanish Empire fought for supremacy in the Mediterranean Sea and the corsairs were active. The period of persistence was the time when the North African regencies signed peace treaties with European countries and the corsairs had settled down. The period of decline was the time when the corsairs were abolished as a result of the adoption of the resolution banning corsairs by the European Great Powers and the military pressure on the North African regencies.

During the three periods, the Modern World-System came into existence in Europe. In the “long” 16th century and “long” 17th century of the World-Systems analysis, North Africa was still in the external arena of the Modern World-System. However, it was in the latter half of the “long” 18th century that the Modern World-System entered the period of re-expansion, North Africa came to be politically and economically incorporated into the Modern World-System and began to be peripheralized.

From the perspective of World-Systems analysis, the corsairs of North Africa, right from the end of the 15th century to the beginning of the 19th century, remained a form of conflict between the Modern World-System and another World-System that the regencies belonged to. In addition, the presence of North African corsairs prevented Spain from conquering North Africa during the 15th and 16th centuries, and as a result, delayed the incorporation of North Africa into the Modern World-System. However, in the early 19th century, the corsairs of North Africa were abolished for being an obstacle to the activities of the Capitalist World-Economy. After the abolition of corsairs, who were a barrier to the expansion of the Modern World-System, North Africa was incorporated into the World-System and peripheralized.

Key words: North Africa, History of Pirates, The Modern World-System

はじめに

15世紀末以降、北アフリカのアルジェリアやチュニジア、リビア沿岸を拠点とする海賊が地中海に出没した。ヨーロッパ側から「バルバリア海賊」と呼ばれた北アフリカ海賊は、その後3世紀にわたって存続する。

状況が大きく変化するのは、19世紀初頭である。ナポレオン戦争が終わり、ウィーン体制が成立すると、イギリスやフランス、オーストリア、ロシアなどの列強諸国は一致して北アフリカ海賊の廃絶に乗り出し、数年のうちに地中海から海賊の姿は消えてゆく。

本稿では、15世紀末から19世紀初頭の北アフリカ海賊について、イマニュエル・ウォーラーステインの世界システム論の観点から歴史の再解釈を試みたい。北アフリカ海賊はなぜ生まれ、存続し、終焉したのか。近代世界システムの生成と北アフリカ海賊の盛衰を重ね合わせながら、世界システム論の文脈で北アフリカ海賊の誕生・存続・終焉の意味を考えるというのが本稿のねらいである¹⁾。

以下ではまず、ウォーラーステインの世界システム論について、近代世界システムの構造的特徴と15世紀後半から19世紀初頭までの生成過程をまとめる。次に、北アフリカ海賊の歴史について、15世紀末から16世紀の誕生期、17世紀から18世紀の存続期、19世紀初頭の終焉期の三期に分け、それぞれの時期における活動の特徴や北アフリカ＝ヨーロッパ関係の変化について整理する。最後に、世界システム論の観点から北アフリカ海賊とはどのような存在だったのか、また、近代世界システムの生成に北アフリカ海賊がどのような影響を及ぼしたのかについて考えたい。

1. 近代世界システムの構造

ウォーラーステインの世界システム論は、15世紀後半にヨーロッパで生まれた資本主義の世界経済が発展と停滞の周期を経ながら外延部を組み込んで拡張していき、世界全体を覆う近代世界システムとして生成されたとする歴史認識であり、社会分析である。それは、従来の一国史とは異なるグローバル・ヒストリーとしての歴史認識であると同時に、近代に生まれた世界システムが資本主義という特異な性質を内包したシステムであると指摘する歴史認識でもある。

ただし、ここでいう世界システムとは、必ずしも世界全体を包摂しているという意味ではなく、一定領域がひとつの統一体をなしているという意味で世界

システム（World-System）と称される。

近代以前にも一定領域の統一体としての世界システムは存在したが、従来の世界システムは政治的な統一体としての「世界帝国」であったのに対し、近代世界システムは経済的な統一体としての「世界経済」である点に大きな特徴を持っている。15世紀後半にヨーロッパで誕生した資本主義の世界経済は、政治的には諸国家から編成される多元性を伴いつつ、経済的な統一体として、その後、非ヨーロッパ地域を組み込んでいき、最終的には世界全体を覆う世界システムとなったのである。

それでは、近代世界システムが内包している資本主義的性質とはどのようなものなのだろうか。ウォーラーステインは、その特徴として、「資本は自己増殖を第一の目的ないし意図として使用される」²⁾と指摘する。すなわち、資本主義的世界経済の下では、資本が支配者によって浪費されてしまうのではなく、投資に回される結果、拡大再生産が起り、さらなる資本蓄積が進んでいくのである。

ただし、資本蓄積は世界システムの内部で均等に進むわけではない。近代世界システムは、分業や労働様式の違いによって中核・半周辺・周辺という地域に分節化されている。そして、周辺から中核への富の移転によって、資本が流入する中核では工業化など経済発展が進む一方³⁾、剰余価値が流出する周辺では低賃金・単純労働によるモノカルチャー化が進み、低開発に陥ってしまうのである⁴⁾。

こうした特徴を持つ資本主義的世界経済が生成しえた条件として、ウォーラーステインは次の三点を挙げている⁵⁾。第一が地理的拡大と生産物の多様性であり、第二が多様な労働管理方法であり、第三が中核における比較的強力な国家機構の創出である。そして、この三つの成立条件は以下のような相互関係を持っている。

まず、近代世界システムの下では、市場を通してあらゆるものの商品化が促され、世界的な規模で分業が進んでいく。同時に、分業内容に合わせて、周辺では奴隷制や再版農奴制、中核では賃金労働というように多様な労働管理方式が採用される。カリブ海での奴隷制を伴う砂糖プランテーションはその一例である。そして、周辺と中核は商品の交換すなわち貿易を通して結ばれることになる。

ここで重要なのが、周辺の一次産品など低賃金の商品と中核の工業製品など高賃金の商品の交換は、一見中立的な経済行為に見えながらも、実際には周辺から中核への剰余価値の移転にはかならないという点である。不平等交換（Unequal Exchange）⁶⁾と呼ばれるこうした取引の結果、中核では剰余価値が

流入して資本蓄積が進む一方、周辺では剰余価値が奪われ、資本蓄積が進まないまま、モノカルチャー化が進むのである。そして、こうした不等価交換を持続的に強要できるように、中核では強力な国家機構が創出されるのに対し、周辺では中核に対して従属的な状態に留め置かれるのである。

先に見たように、近代世界システムは政治的な統一体としての世界帝国ではなく、経済的な統一体としての世界経済である。資本蓄積という観点から見れば、国内外の秩序維持のために大きなコストがかかる世界帝国よりも、政治的には多元化した世界経済のほうが効率的だったのである。

なお、近代世界システムは、政治的には統一されてはいないとはいえ、諸国家間においてインターステイト・システムと呼ばれる共通制度や共通規範が存在し、資本主義的世界経済を支えている⁷⁾。

すなわち、近代世界システムとは、経済的には資本主義的世界経済の特徴を持ち、政治的には諸国家から編成されつつもインターステイト・システムによって束ねられているのである。

2. 近代世界システムの展開

近代世界システムはこうした構造的特徴を持っているが、同時にそれは歴史的に形成されてきた史的システムでもある。それでは、近代世界システムは具体的にどのように生成されてきたのであろうか。

ウォーラーステインは、1450年頃から1620～40年頃までを「長期の16世紀」と呼んでいるが、資本主義的世界経済が誕生したのは、中世ヨーロッパの封建制が危機に陥っていたこの時期である⁸⁾。当初、資本主義的世界経済はヨーロッパと大西洋岸諸島を範囲とし、木材や小麦などを生産する北欧や穀類や砂糖、ワインなどを生産するマデイラ諸島などの大西洋岸諸島が周辺に位置づけられていた。長期の16世紀の後半になると、ヨーロッパに征服されたカリブ海・中南米地域で砂糖プランテーションや銀鉱山の開発が進み、同地域の世界システムへの組み込みが始まる。

1600年頃から1750年頃までの「長期の17世紀」は、近代世界システムの「凝集 (Consolidation)」期である⁹⁾。この時期は、近代世界システムにおいて構造的な変化は起こらず、むしろ、分業や労働管理の多様化、中核と周辺への両極化、中核における国家機構の強化など16世紀に始まった世界システムの構造化が進んでいく。ただし、16世紀が拡張局面であったのに対し、17世紀は停滞局面であり、カリブ海地域を除けば、世界システムの地理的な拡大は見られなかった。

1730年代から1840年代までの「長期の18世紀」は、資本主義的世界経済の再拡大期である¹⁰⁾。この時期は、近代世界システムが外延部を組み込み、地理的に拡大していく。具体的には、インド亜大陸やオスマン帝国、ロシア帝国、西アフリカなどの地域が近代世界システムに組み込まれ、周辺化していく時期である。

ここで、世界システムへの「組み込み (Incorporation)」とは何を意味するのか確認しておこう。

組み込みの過程とは、世界システムの外部にある外延部の時代、組み込みの時代、世界システムに内部化された周辺化の時代という三段階に分けることができる¹¹⁾。

世界システムの内部と外部を分ける違いは、交易関係の有無ではない。外延部の時代すなわち世界システムの外部の時代にも交易は行われるが、その場合は奢侈品の交易である。一方、周辺化の時代すなわち世界システムの内部となった時代には、社会生活や生産活動における必需品として大量に輸送される商品の交易が行われる¹²⁾。こうした商品は基礎商品 (Commodity) と呼ばれ、先に挙げた16世紀における北欧の木材や大西洋岸諸島の穀類や砂糖、ワイン、17世紀におけるカリブ海・中南米地域の砂糖や銀などがそうした基礎商品の例である。そして、世界システム内の基礎商品の流通網は商品連鎖 (Commodity Chains) と呼ばれる。

ウォーラーステインは、組み込みについて、「本質的に地理的な意味で、特定の地域における何か重要な生産過程が、「資本主義的世界経済」の分業体制を構成する商品連鎖の一環として、不可欠になることを意味する」¹³⁾と説明している。すなわち、組み込みの過程では、外延部の地域において中核への輸出品である食料や原材料などを生産する分業体制が確立し、商品連鎖を通して中核と周辺が結びつくのである。

以上のような経済面に加えて、近代世界システムへの組み込みにおいては、政治面における組み込みも行われる。すなわち、当該地域のインターステイト・システムへの組み込みである。

インターステイト・システムへの組み込みとは、「当該地域にすでに存在している「国家」が、「インターステイト・システム内国家」に変身するか、同様の性格を持つ別の政治体に代位されることになるか、あるいは、すでにインターステイト・システムに組み込まれている既存の国家に吸収されるか、のいずれか」¹⁴⁾であるとされる。言い換えれば、インターステイト・システムへの組み込みとは、資本主義的世界経済における分業体制を受け入れるような従属国家になるか、新たに生み出される傀儡国家になるか、あるいは外延部の国家

が消滅して植民地となるかという三つの形態に分かれるのである。

外延部における国家機構が強力であるときには外延部が周辺化を受け入れない可能性があるが¹⁵⁾、18世紀には、ヨーロッパにおける軍事力の発達によって中核の外延部に対する軍事的優位が生じ、近代世界システムの拡張すなわち外延部への組み込みが進展するのである¹⁶⁾。

ここで、組み込みの具体例としてオスマン帝国のケースを見てみよう。ウォーラステインは、オスマン帝国とヨーロッパの貿易量が増えた1750年頃以降をオスマン帝国の資本主義的世界経済への組み込み期としている¹⁷⁾。同時期には、オスマン帝国からヨーロッパへの輸出品が、モヘアの布地からモヘアの撚糸、絹織物から生糸、綿糸から原綿など、製品ないし半製品から原材料へと移行した。また、オスマン帝国支配下のアナトリアやバルカン半島で、穀物や綿花などの換金作物の生産が拡大し、18世紀末には、「フランスの綿工業の死命を制するほどの原料供給源になっていた」¹⁸⁾と指摘している。

さらに、第一次露土戦争に敗れ、1774年にキュチュク・カイナルジャ条約を締結したオスマン帝国は、以後、ロシアの拡張に対して外国の支援なく自国を防衛することができなくなり、ヨーロッパ列強の介入を招くことになる。世界システム論の観点から見れば、それはインターステイト・システムへの組み込みにほかならない¹⁹⁾。

ただし、ここでウォーラステインがいうオスマン帝国とはアナトリアやバルカン半島などを指しており、北アフリカ諸領はその射程に入っていない。北アフリカ諸領における組み込みの時期については、後に議論したい。

3. 北アフリカ海賊の誕生期

ここまで近代世界システムの構造と15世紀後半から19世紀前半までの近代世界システムの生成について確認してきたが、ここからは同時期における北アフリカ海賊の歴史について見ていきたい²⁰⁾。

北アフリカ海賊の歴史は、大きく分けて、15世紀末から16世紀の誕生期、17世紀から18世紀の存続期、19世紀初頭の終焉期に分けることができる²¹⁾。

地中海の海賊は古代から存在したが、本稿で取り上げる北アフリカのアルジェリア・チュニジア・リビア沿岸を拠点とする海賊が活発になったのは、15世紀末以降である。そのきっかけは、スペインにおけるレコンキスタであった。イベリア半島を追われたイスラーム教徒の多くは北アフリカに移り住んだが、彼らの中からスペイン商船やスペイン本土を襲撃する海賊が現れたのである。当時のスペインは、カスティーリャ王イサベル1世とアラゴン王フェルナンド

2世のカトリック両王の時代である。

北アフリカ海賊の活動が激しくなると、スペインは北アフリカに艦隊を送り、海賊の拠点となっていた港を攻撃する。1509年にはオランを、1510年にはベジャイアを、1512年にはアルジェを攻略し、港に城砦を築いて海賊の活動を抑制する²²⁾。

スペイン艦隊の遠征によって北アフリカ海賊の活動は一時沈静化したが見、そこに現れたのが東地中海出身のトルコ人海賊であった。なかでもっとも有名な海賊はウルージとハイルッディーン兄弟である²³⁾。

エーゲ海レスボス島生まれのウルージとハイルッディーンは、1504年、2隻の小型ガレー船を率いてチュニスに現れる。そして、チュニスを拠点にイタリアのエルバ島沖でローマ教皇が所有する大型ガレー船2隻を拿捕するなど海賊行為を繰り返すのである。さらに、1516年にはウルージはアラブ人首長が支配するアルジェの町を征服し、自ら支配者となった。

ウルージらによる海賊行為に危機感を強めたスペインは、再び北アフリカに軍を送る。スペインでは、1516年、のちに神聖ローマ皇帝カール5世となるカルロス1世が即位していた。

1517年、スペインはウルージの滞在していたアルジェリア西部のトレムセンに進軍する。この戦いでウルージは命を落とし、弟のハイルッディーンがアルジェの統治を引き継ぐことになる。そして、スペイン軍の脅威にさらされたハイルッディーンは、スペインに対抗するためオスマン帝国に支援を求めるのである。

15世紀中葉にコンスタンティノープルを征服し、東地中海で勢力を広げていたオスマン帝国は、ハイルッディーンの要請を受けてアルジェに援軍を送るとともに、ハイルッディーンをオスマン帝国アルジェ領総督に任命した。この時以来、アルジェはオスマン帝国の属領となった。そして、オスマン帝国からの支援を受けたハイルッディーンは、ハフス朝の混乱に乗じて1533年にチュニスを征服するなど、北アフリカで勢力を広げていく。

一方、オスマン帝国の西地中海地域への進出に対抗するため、スペインのカルロス5世は自らチュニスに遠征し、1535年、同地を征服する。敗れたハイルッディーンはイスタンブールに赴き、チュニスを奪回するための援助を求める。当時のスルタンであるスレイマン1世は、ハイルッディーンをオスマン海軍大提督に任命するとともに、イタリア南部の攻撃を指示した。

スレイマン1世の指示を受けたハイルッディーンは、オスマン艦隊を率いてイタリア南部を掠奪する。そして、この襲撃に対し、スペインやヴェネチア、ローマ教皇領などは神聖同盟を結成するのである。

1538年、神聖同盟の艦隊が出撃し、オスマン帝国艦隊とプレヴェサの海戦で対決する。この時、神聖同盟艦隊の司令官はジェノヴァの提督であったアンドレア・ドーリアであり、オスマン帝国艦隊の司令官はハイルッディーンであった。結局、プレヴェサの海戦は最終的な決着がつかないまま、神聖同盟の艦隊は解散した。

1571年には、再結成された神聖同盟の艦隊とオスマン帝国艦隊がレパントの海戦で再び衝突するが、いずれの側も地中海の覇権を握るには至らなかった。結果的に、北アフリカを拠点とする海賊は排除されることなく、17世紀以降も存続するのである。

4. 北アフリカ海賊の存続期

ここで注意が必要なのは、この戦いがキリスト教世界とイスラーム世界の対立というような単純な二分法的図式ではないことである。この時代のフランスの行動がそれを物語っている。

ヴァロア朝第9代の王であるフランス王フランソワ1世は、神聖ローマ皇帝選挙でスペイン王カルロス1世に敗れ、さらにイタリア戦争では自身がスペイン軍に一時捕らわれるという事態を招いた。スペインに対して劣勢に陥ったフランソワ1世がとった方策は驚くべきものであった。フランソワ1世は、スレイマン1世に接近し、オスマン帝国と友好関係の構築をはかるのである²⁴⁾。

フランスは、オスマン帝国内での通商などの優遇措置であるカピチュレーションを認められ、さらにはフランス艦隊とオスマン艦隊の共同作戦を実施する。オスマン帝国海軍の大提督であったハイルッディーンは、フランス南部のマルセイユ港に来航し、フランス艦隊と連合して近隣の都市ニースを襲撃している。スペインとフランスの覇権争いは、オスマン帝国を巻き込んでいたのである。

すでに見た通り、15世紀後半から16世紀はヨーロッパにおいて資本主義的世界経済が誕生した時期である。ただし、ウォーラーステインも指摘するとおり、この時期はスペインとフランスがヨーロッパで覇権争いをしていった時期でもある。スペインとフランスの争いは、最終的には両王室の財政破綻を招き、1559年にはカトー・カンブレジ条約の締結で終結した。それは、世界システム論の文脈から見れば、スペイン、フランス両国ともに世界帝国の建設を目指す試みの挫折であった²⁵⁾。

他方、15世紀後半から16世紀は大航海時代の幕開けの時期でもある。ポルトガルによるアフリカ沿岸の探検航海に始まり、バルトロメウ・ディアスの喜

望峰の到達、コロンブスの「新大陸」発見、ヴァスコ・ダ・ガマのインド到達と、大西洋やインド洋への航路が開け、ヨーロッパ人の進出が始まっていた。それに伴い、地中海貿易やレヴァント貿易の役割は低下し、地中海はもはや覇権争いの場ではなくなっていく。17世紀や18世紀におけるヨーロッパ列強の争いの舞台は、カリブ海やインド洋に移っていくのである。

表1：北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の条約
(17世紀)

年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領
1605		フランス	
1617	オランダ		
1622	オランダ	オランダ	
	イギリス		
1626	オランダ	オランダ	
1628	フランス		
1640	フランス		
1658			イギリス
1660	イギリス		
1662	イギリス	イギリス	イギリス
	オランダ	オランダ	
1665		フランス	
1666	フランス		
1668	イギリス		
1672		フランス	
1673	イギリス		
1676			イギリス
1679	オランダ		
1681			フランス
1682	イギリス		
1683			オランダ
1684	フランス		
1685		フランス	フランス
1686	イギリス	イギリス	
1689	フランス		
1693			フランス
1699	イギリス	フランス	

※ 条約の改正や更新を含む
(出典：Panzac, Daniel, *Les Corsaires Barbaresques: la Fin d'une Épopée 1800-1820*, Paris: CNRS Editions, 1999)

こうした状況の下、北アフリカ海賊は存続した。ただし、ヨーロッパ列強の地中海への関心が低下したこともあり、16世紀にスペインが行ったような北アフリカへの大規模な遠征が行われることはなかった。また、北アフリカ海賊の側でも従来のようなヨーロッパへの激しい掠奪はもはや見られなくなった。というのも、オスマン帝国本国がフランスやイギリス、オランダとカピチュレーションを取り交わしたのに続き、オスマン帝国の属領となったアルジェ領やチュニス領、トリポリ領も、これらの諸国とそれぞれ和平条約を締結するからである²⁶⁾。

17世紀および18世紀に締結された和平条約は、表1および表2のとおりである。17世紀には、フランス、イギリス、オランダのみであったが、18世紀に入ると、かつては敵対していたスペインやヴェネチアなどを含めた他のヨーロッパ諸国とも和平条約を結んでいる。ただし、北アフリ

表2：北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の条約（18世紀）

年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領	年	アルジェ領	チュニス領	トリポリ領
1703	オランダ		オランダ	1758		オーストリア	
1704		オランダ		1760	オランダ	オランダ	
1708		オランダ		1761			イギリス
1710		フランス		1762	イギリス	イギリス	
1712	オランダ		オランダ	1764	フランス		
1713	オランダ	フランス			ヴェネチア	ヴェネチア	
1716		イギリス	イギリス	1765		フランス	ヴェネチア
1719	フランス			1766			ヴェネチア
1720		フランス	フランス	1768	オランダ	フランス	
1725		オーストリア		1770		フランス	
1726	オランダ		オーストリア	1772	デンマーク		
1727	オーストリア			1774			フランス
1728	フランス	オランダ	オランダ	1780		フランス	フランス
1729	スウェーデン		フランス	1781		フランス	
1730			イギリス	1784		オーストリア	スペイン
1731	オランダ			1785			ナポリ
1736		スウェーデン		1790	フランス		
1741		オランダ	スウェーデン	1791		スペイン	
			ナポリ	1792		ヴェネチア	
1742		フランス		1793	ポルトガル		
1743		フランス		1794	オランダ		
1748		オーストリア		1795	アメリカ	フランス	スペイン
1751		イギリス	イギリス	1797			デンマーク
	デンマーク	デンマーク				アメリカ	アメリカ
1752			フランス	1798			スウェーデン
1754	スウェーデン		イギリス	1799	ナポリ	ポルトガル	ポルトガル
1757	オランダ			1800	フランス		

※条約の改正や更新を含む

(出典：Panzac, *op. cit.* より、筆者一部修正)

カ諸領は条約締結の条件としてヨーロッパ諸国に貢納を求め、その条件をめぐって紛争が生じることもあった。

17世紀から18世紀には、北アフリカ海賊の活動は沈静化したとはいえ、条約未締結国や紛争国に対する掠奪行為は継続した。こうして、北アフリカ海賊は沈静化しつつも存続したまま、ヨーロッパ側も北アフリカ諸領側も最終的には和平条約を締結することで問題を処理していたのである。

5. 北アフリカ海賊の終焉期

ヨーロッパと北アフリカ諸領の間の均衡が崩れ、事態が大きく動き出すのは、19世紀初頭である。その端緒を開いたのは、建国したばかりのアメリカ合衆国であった²⁷⁾。

1776年の独立宣言と1783年のパリ条約によってイギリスからの独立を果たしたアメリカは、その代償として北アフリカ海賊による掠奪の対象となった。北アフリカ諸領との関係で見れば、イギリスからの独立はアメリカの条約未締結状態への転換を意味したからである。実際、1785年には、地中海を航行していたアメリカ商船が相次いでアルジェ領のガレー船に拿捕されるという事件が発生する。

こうした事態に対し、当時の駐英大使で後の第2代大統領であるジョン・アダムズは、現実的な観点から北アフリカ諸領への貢納による条約締結を主張する。一方、当時の駐仏大使で後の第3代大統領であるトマス・ジェファソンは、貢納の拒否と軍事的威圧による条約締結を主張し、両者の間で論争が起きる。結局この時には、アダムズの主張するとおり、貢納と引き換えに北アフリカ諸領と条約が取り交わされ、アメリカ商船の船員は解放された。

ただし、条約の締結によって問題が解決されたわけではなかった。1801年、追加の貢納を求めるトリポリ領はアメリカとの条約を破棄して宣戦布告を行い、両者の間で戦争が始まる。大統領に就任したジェファソンは地中海に艦隊を送り、トリポリを封鎖して砲撃を加える。一方、トリポリ領の側もアメリカ艦船を拿捕するなど反撃する。アメリカは一貫して追加の貢納の支払いを拒否したものの、最終的には、自国民解放の身代金を支払うことを条件に、1805年、和平条約が再締結され、トリポリ戦争は終了した。

トリポリ戦争から数年後、今度はアルジェ領との間で紛争が発生する。1812年、米英戦争が始まると、アルジェ領がアメリカとの条約を破棄してアメリカ商船を拿捕するのである。米英戦争終結後の1815年、アメリカはアルジェに艦隊を派遣し、圧倒的な軍事力を背景に条約交渉を行う。その結果、貢納なしでの条約の再締結に加え、アメリカに対する賠償金の支払いを勝ち取るのである。

一方、ヨーロッパでも、北アフリカ海賊問題に関して新たな動きがみられた。元イギリス海軍中将のシドニー・スミスが北アフリカ海賊の鎮圧をヨーロッパ各国に訴える運動を始めるのである。スミスは、ナポレオン戦争後のウィーン会議（1814-15年）にも赴き、各国首脳に北アフリカ海賊問題を取り組むように訴える。

スミスが各国首脳に送った告発文の冒頭は次のとおりである。

「いまや産業発展し、文明の利益を最も享受する温和な人々が暮らす文明化したヨーロッパは西アフリカにおける黒人奴隷貿易の廃止について議論し、商業の利益や人間・財産の安全の利益を西アフリカに広げる努力を行っている。そのようなときに北アフリカについてまったく注意が向けられていないというのは驚くべきことである。そこでは近隣住民を抑圧するだけでなく、彼らを奴隷とし、彼らを使って武装船でヨーロッパ沿岸の勤勉な農夫や温和な住民を襲うトルコ人海賊が暮らしている。このような恥ずべき掠奪行為は人間性に反しているばかりか、最も悪質な行為で商業活動を妨げている。というのも今日、商船の船員はみな、地中海であっても大西洋であっても、海賊にさらわれ、アフリカで奴隷にされるという不安を抱きながら航海をしているからである……知性と文明の進歩はどんなことがあろうと、このような海賊行為を根絶させねばならない」²⁸⁾

すなわち、スミスは、人道的理由と商業活動の自由という観点から北アフリカ海賊の廃絶を訴えているのである。

1816年春、イギリスは北アフリカ諸領に艦隊を派遣する。身代金の支払いを拒否するだけでなく、賠償金も獲得するというアメリカの軍事的・外交的成功を受けて、イギリスは北アフリカ諸領に対して貢納や身代金なしでの条約締結を求め、アルジェに激しい砲撃を加えて要求を押し通した。この後、チュニス領やトリポリ領もイギリスの要求に従った。

さらに、ロシアのアレクサンドル1世は、北アフリカ海賊問題に関するスミスの訴えに共感を示し、イギリスに対して国際的な協議の場で同問題を取り上げるように働きかける。そして、1816年8月から1818年8月まで開かれたロンドン大使級会議の場で、北アフリカ海賊問題が討議されるのである²⁹⁾。

ウィーン会議後のヨーロッパ国際秩序はウィーン体制と呼ばれるが、その特徴のひとつは会議外交を含む列強諸国による協調体制である。すなわち、北アフリカ海賊問題は、ヨーロッパ列強が協調して取り組む問題となったのである。

イギリス、フランス、ロシア、オーストリア、プロイセンの5列強は、ロンドン会議に加え、1818年9月からの開催されたアーヘンでの首脳級会議で北アフリカ海賊問題について討議し、11月、議定書を採択する。議定書は、北アフリカ諸領が「平和的な商業活動に敵対するシステム」を放棄しない場合には、ヨーロッパ諸国は総同盟を結成する旨、諸領に通達するという内容であっ

た³⁰⁾。

同議定書に基づき、1819年9月から10月にかけて英仏連合艦隊がアルジェ、チュニス、トリポリに來航する。北アフリカ諸領に伝えられた通告文の一部は次のとおりである。

「ヨーロッパ列強は、全ての国の一般的利益に反するだけでなく、商業活動を行う人々の繁栄への希望をも打ち壊す海賊のシステムを廃絶することを決定した。もし、バルバリア諸領が全く平和的な商業活動に対する敵対的システムを保持し続けるのならば、ヨーロッパ列強の総同盟との対決を必ずや引き起こすであろう。事が手遅れになる前に、[ヨーロッパ] 同盟によって自分たちの存在が危うくなるという可能性を考えるべきである」(角括弧内は筆者補記)³¹⁾

この通告文でも、北アフリカ海賊は商業活動への敵対的システムとして糾弾されている。

海賊システムの廃絶を求めるヨーロッパの要求に対し、トリポリ領は容認したものの、アルジェ領とチュニス領は、条約未締結国とは交戦中であり、自衛の手段は放棄しないとして要求を拒絶した³²⁾。とはいえ、ヨーロッパによる軍事的圧力を前に、これ以後、北アフリカ諸領による海賊行為は事実上放棄された。

北アフリカ海賊問題が最終的に終結するのは、1830年である。同年6月、フランス軍がアルジェに侵攻し、以後、130年余りにわたる植民地支配が始まる。この後、アルジェリアではフランス人入植者による農場経営が進み、19世紀後半からは特に醸造用ブドウ栽培が主力となり、輸出用ワインの生産が増大していく³³⁾。

一方、1830年7月、チュニス領はフランスとの条約を締結する。条約では、海賊の廃絶が明記されたほか、フランスへのサンゴ漁独占権の付与や外国商人による商業活動の自由などの条項も定められた。北アフリカ海賊の廃絶とともにチュニス領内での自由な商業活動が認められたのである。北アフリカ史家のダニエル・パンザックは、1830年のフランス＝チュニス領条約について、「海軍力によってヨーロッパ列強がアフリカ・アジア諸国に課した19世紀最初の不平等条約」³⁴⁾であると指摘している。なお、チュニス領では、19世紀初頭から輸出向けオリーブ油の生産が活発になりつつあったが³⁵⁾、19世紀後半にはオリーブ油に加え、新たにリン鉱山が開発されて輸出が拡大し、ヨーロッパとの経済関係は強化されていく³⁶⁾。

おわりに

ここまで、15世紀後半から19世紀初頭までの近代世界システムの生成と北アフリカ海賊の変容について見てきた。それでは、北アフリカ海賊の誕生・存続・終焉は、世界システム論の観点から見てどのように理解できるのだろうか。

北アフリカ海賊の誕生期は、概ね、近代世界システムにおける「長期の16世紀」に相当する。この時期はヨーロッパにおいて資本主義的世界経済が生成され始めた時代である。また、ヨーロッパ内ではスペインとフランスが覇権を争っていたが、1559年のカトー・カンブレジ条約によって両国ともに世界帝国化の野望は潰えることになった。この時期の近代世界システムの地理的範囲は、中核としてのヨーロッパと周辺としての北欧や大西洋岸諸島、カリブ海・中南米地域の一部に限られており、北アフリカは近代世界システムの外部に位置していた。すなわち、北アフリカは、ヨーロッパの近代世界システムとは別個のオスマン帝国を中心とする世界システムに属していたのである。

この点から考えれば、この時期の北アフリカ海賊とは、異なる世界システム間の争いのなかで生じた存在であるといえよう。すなわち、スペイン帝国を中心とするヨーロッパの近代世界システムとオスマン帝国を中心とする別の世界システムとの間の衝突の一形態として海賊行為が現れたのである。海賊の首領であったハイルツディーンがオスマン帝国海軍の大提督としてプレヴェサの海戦の指揮を執ったのは、その象徴であろう。ただし、この海戦においてフランスが神聖同盟に加わっておらず、のちにはオスマン帝国に接近するように、この時期のインターステイト・システムは未成熟であった。

次に、北アフリカ海賊の存続期は、概ね、「長期の17世紀」と「長期の18世紀」の前半に相当する。「長期の17世紀」は資本主義的世界経済の停滞期で、近代世界システムの地理的拡張は見られず、システム内の構造化が強まった時代である。なお、オスマン帝国本国は「長期の18世紀」の前半に近代世界システムへの組み込みが始まっていたが、北アフリカは依然として外延部に留まっていた。

この存続期は北アフリカ諸領とヨーロッパ諸国の条約締結により、海賊の活動が沈静化した時期である。資本主義的世界経済が外部への拡張を指向せず、オスマン帝国の地中海における覇権的行動もみられなかったため、ふたつの世界システム間の争いは激化せず、均衡的な関係が続いた。そのため、両世界システム間の争いの現れとしての北アフリカ海賊も沈静化したのである。

最後に、北アフリカ海賊の終焉期は、概ね、「長期の18世紀」の後半に相当する。この時期は近代世界システムの再拡大期である。アルジェ領やチュニス

領においても、19世紀にはフランスによる植民地化や政治経済的な影響力の増大とともに、輸出品である醸造用ブドウやオリーブ油、リン鉱石の生産が進み、資本主義的世界経済の分業体制の一角を担って周辺化していく時期である³⁷⁾。北アフリカ海賊はこのような近代世界システムへの組み込みが始まる時期に終焉を迎えた。

それでは、なぜ北アフリカ海賊は終焉したのであろうか。直接的には、ウィーン体制の下、ヨーロッパ列強による協調外交によって北アフリカ海賊の廃絶が決議され、北アフリカ諸領への圧力が強まったからである。ただし、シドニー・スミス の要望書に見られたように、北アフリカ海賊の廃絶は、人道的理由とともに商業活動の自由がその動機であったことを想起する必要がある。

18世紀までの外延部としての交易すなわち奢侈品交易であるならば、ヨーロッパ側も自国の安全が条約で保障されていれば、むしろ他国の参入を阻害する北アフリカ海賊の存在は自国の利益独占のためには好都合なのである³⁸⁾。ところが、基礎商品の交易においては、海賊行為は中核と周辺との交易による資本蓄積を阻害する存在となる。それゆえ、近代世界システムが北アフリカ地域を組み込むにあたり、資本主義的世界経済の商品連鎖を脅かす北アフリカ海賊は排除されねばならなかったのである。

また、資本主義的世界経済への組み込みを実現するため、ウィーン体制下の協調外交としてインターステイト・システムが政治的な影響力を与えた。「長期の16世紀」には未成熟であったインターステイト・システムも、「長期の18世紀」の後半にはヨーロッパ各国の利害が調整され、資本主義的世界経済のさらなる発展のための決議や措置をとりうる体制に成長していたといえよう。

まとめれば、15世紀末から19世紀初頭における北アフリカ海賊とは、北アフリカ諸領が近代世界システムの外延部に位置していた時期に、近代世界システムとその外部にある世界システム間の争いの一形態として現れた存在であった。また、北アフリカ海賊の存在は、15世紀末から16世紀にかけてスペインによる北アフリカ征服を妨げ、結果的に北アフリカ地域が近代世界システムに組み込まれるのを遅らせる役割を果たした。ただし、ヨーロッパとの軍事的格差が拡大するとともに近代世界システムが再拡大期を迎えた19世紀初頭には、北アフリカ海賊は資本主義的世界経済の活動を阻害する存在として廃絶の対象となる。そして、近代世界システム拡張の障壁となっていた海賊の廃絶後、北アフリカ地域は近代世界システムに組み込まれ、周辺化していくのである。

注

- 1) 本稿と同様の問題意識に立ち、筆者は、次の論文において、ウォーラーSteinの世界システム論の観点から16世紀から18世紀初頭のカリブ海賊についての歴史解釈を試みた。桃井治郎「近代世界システムとカリブ海賊」『アリーナ』（中部大学）、第23号、288-297頁、2020年11月。
- 2) イマニュエル・ウォーラーStein『史的システムとしての資本主義』（川北稔訳）、岩波書店、1997年、6頁。
- 3) 「中核に余剰が移送されると、それだけこの地域に資本が集中し、機械化をすすめるための基金が、他の地域に比べて得やすくなった。その結果、中核地域の生産者は既知の商品の生産競争で有利になったばかりか、まったく新しい希少価値のある商品をつくり出して、同じプロセスを再生することができた」同書、34頁。
- 4) 「全体としてみれば、周辺がモノカルチャーにむかう趨勢を示したのに対し、中核部では職業の多様化と専門化が時代の潮流となっていたのである」イマニュエル・ウォーラーStein『近代世界システムⅠ：農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』（川北稔訳）名古屋大学出版会、2013年、100頁。
- 5) 同書、30頁。
- 6) 不等価交換の概念は、もともとはアンドレ・G・フランクなど従属論と呼ばれる論者によって提唱されてきた概念である。
- 7) 「インターステイト・システムとは、諸国家がそれに沿って動かざるをえない一連のルールであり、諸国家が生きのびてゆくのに不可欠な合法化の論拠を与えるものである」ウォーラーStein『史的システムとしての資本主義』、69頁。
- 8) 長期の16世紀における世界システムについては、ウォーラーStein『近代世界システムⅠ』を参照。
- 9) 17世紀における世界システムについては、次を参照。イマニュエル・ウォーラーStein『近代世界システムⅡ：重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集 1600～1750』（川北稔訳）名古屋大学出版会、2013年。
- 10) 18世紀における世界システムについては、次を参照。イマニュエル・ウォーラーStein『近代世界システムⅢ：「資本主義的世界経済」の再拡大1730s～1840s』（川北稔訳）名古屋大学出版会、2013年。
- 11) 同書、156-157頁。
- 12) 「「世界経済」の周辺とは、基本的に低位の商品——つまり労働の報酬の低い商品——を生産するが、重要な日用消費財を生産するという意味で、全体としての分業体制の大切な一環をなしている地域のことである。他方、「世界経済」の外の世界というのは、別の世界システムに属しているうえに、問題になっている「世界経済」との間に貿易関係はあっても、主として奢侈品の交易、つまりしばしば「豊かな貿易」と呼ばれる交易をしかもたないような地域のことである」ウォーラーStein『近代世界システムⅠ』、354-355頁。
- 13) ウォーラーStein『近代世界システムⅢ』、157頁。

- 14) 同書、190頁。
- 15) 「外延部とは、「資本主義的世界経済」はその地域の商品を探めているものの、その地域は対価として「[ヨーロッパの]工業製品を輸入することに——おそらく文化的に——抵抗しており、なお政治的にも十分強力で、そうした選択を維持できるような地域のことである」同書、187頁。
- 16) 同書、xii頁。
- 17) 同書、166-167頁。
- 18) 同書、166頁。
- 19) 同書、194頁。
- 20) この時代の北アフリカ海賊史の詳細については、次を参照。桃井治郎「[バルバリア海賊]の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」(中部大学博士学位論文)、2008年2月 (<https://ci.nii.ac.jp/d/link/500001315568>)。
- 21) 厳密に言えば、ダニエル・パンザックが指摘するとおり、17世紀から18世紀の北アフリカ=ヨーロッパ関係は、1600~50年のフランス、イギリス、オランダと初めて条約を締結した「最初の協定期」、1650~1720年のヨーロッパ諸国との関係が不安定化した「軍事・外交期」、1720~95年のヨーロッパ諸国と条約を締結した「平穏な関係期」に分類することができる。Panzac, Daniel [1999] *Les Corsaires Barbaresques: la Fin d'une Épopée 1800-1820*, Paris: CNRS Editions, pp. 23-37、および、桃井治郎『[バルバリア海賊]の終焉：ウィーン体制の光と影』中部大学、2015年、24-33頁。

ただし、17世紀から18世紀までの期間を通して北アフリカ海賊は存続しており、また、ヨーロッパと北アフリカ諸領は一時的な紛争はあったものの各々が和平条約を締結して関係が安定化に向かったという傾向があるため、本稿では17世紀から18世紀を北アフリカ海賊の「存続期」としてひとまとまりの時期とみなした。
- 22) Courtinat, Roland, *La piraterie barbaresque en Méditerranée*, Editions Jacques Gandini, 2003, pp. 12-13.
- 23) ウルージとハイルッディーンの兄弟については、以下を参照。Ibid. および Sinânchaouch, *Fondation de la Régence d'Alger, Histoire des Frères Barberousse*, Grand Alger Livres Edition, 2006.
- 24) この時期のオスマン帝国とフランスの関係については、次を参照。桃井治郎『海賊の世界史:古代ギリシアから大航海時代、現代ソマリアまで』中央公論新社、2017年、110-116頁。
- 25) 「[ハプスブルク家とヴァロワ家の]両家の構想は、1557年、結局双方が疲弊の極に達して終わりをづけ、当分ヨーロッパ全域に及ぶ帝国を形成しようという動きは、なくなった」ウォーラステイン『近代世界システム I』、193頁。
- 26) Panzac, *op. cit.*, pp. 25-43.
- 27) この時期のアメリカ合衆国と北アフリカ諸領の関係については、以下を参照。Allen, Gardner W., *Our Navy and The Barbary Corsairs*, Hamden, Connecticut: Archon Books, 1965、および、桃井治郎「[バルバリア海賊]の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」、第3章。

- 28) “Mémoire sur la nécessité et les moyens de faire cesser les pirateries des états barbaresques”, 31/October/1814, ff. 237–238, *Afrique 5, Mémoires et Documents*, Archives du Ministère des Affaires Etrangères, Paris.
- 29) 北アフリカ海賊問題がロンドン会議で議題となった詳しい経緯については、次を参照。桃井治郎「「バルバリア海賊」の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」、88–90頁。
- 30) ロンドン会議およびアーヘン会議での北アフリカ海賊問題をめぐる議論の詳細については、次を参照。桃井治郎「「バルバリア海賊」の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」、90–100頁。
- 31) 27/September/1819, ff. 219–224, *Tunis 43, Correspondances Consulaires et Commerciales*, Archives du Ministère des Affaires Etrangères, Paris.
- 32) 海賊の廃絶要求に対するアルジェ領およびチュニス領の応答の詳細については、次を参照。桃井治郎「「バルバリア海賊」の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」、第5章。
- 33) 宮治一雄『アフリカ現代史V』山川出版社、1994年、72–76頁。
- 34) Panzac, *op. cit.*, p. 277.
- 35) 19世紀初頭のチュニス領におけるオリーブ油生産の増加と対ヨーロッパ輸出依存の経済構造への変化については、次を参照。桃井治郎「19世紀初頭のチュニジア経済危機：対外貿易の変容と危機の増幅メカニズム」『アフリカ研究』（日本アフリカ学会）、第67号、2005年、41–56頁。
- 36) 宮治、前掲書、76–78頁。
- 37) 19世紀初頭におけるオスマン帝国アルジェ領およびチュニス領の資本主義的世界経済への組み込み過程とそのメカニズムについては、別稿にて論じる予定である。
- 38) ロンドン大使級会議において、フランスは北アフリカ諸領とは友好関係を保ってきたことから、北アフリカ諸領の崩壊はかえってフランスに不利益をもたらすとして、ヨーロッパ総同盟による海賊の廃絶活動に消極的であった。桃井治郎「「バルバリア海賊」の終焉—19世紀国際秩序の構造変動—」、95–96頁。